

28. 戦前の政宗騎馬像台石の側面の レリーフの有無

問 戦前の天守台の政宗騎馬像台石の側面に、レリーフがあったのかどうか。

答 戦前の天守台の政宗騎馬像は、昭和10年5月23日⁽¹⁾、政宗3百年祭記念事業として、宮城県青年団が建設したものであります。それが、太平洋戦争末期の昭和19年1月22日、全国的に強行されていた無差別な金属回収にかかり、台石だけを残してすべて供出されてしまいました。戦後の昭和28年、この台石の上にセメント像⁽²⁾が建てられましたが、昭和40年、もとの銅像の原型によって再鋳された騎馬像がこれに代り、現在に至ったのです。

この銅像の製作者は槻木出身の彫刻家小室達⁽⁴⁾で、台石正面には斎藤実書⁽⁵⁾の「伊達政宗卿」、両側面には政宗の像を各時代別に画いたレリーフ4枚、裏面には宮城県青年団の銅像建設趣意書⁽⁶⁾を刻んだ銅板がはめ込まれていました。騎馬像もろとも、これらの銅板一切が回収されてしまったのでした。「仙台」第5版(小倉 著、昭和12) p. 84の「政宗像写真」にレリーフ等が写し出されており、更に製作者小室達の手記により、レリーフが付けられていた事実を確認することができます。次にその全文を掲げて置きます。

『吾等の藩祖伊達政宗卿三百年祭に当り宮城県青年団記念事業として卿の徳風偉烈を顕彰し特に忠孝両道の頌徳奉讃の為の卿の御像を当御本丸御址に建設し永遠に御英姿を敬仰し御遺徳を偲ばんとす。誠に近代稀に見る美挙と言ふべく国民教養の上に貢献する所実に多大なるを信ず。余幸に仙台藩出身の故を以て此の壮挙に参し銅像製作建設の一切を委託せらる。余の光榮や無上にして責任亦重大なり与へられたる貴き使命を惟へば感激に堪へず銅像製作に当るや従来余の本領たる帝展は勿論同志の展覧会其他一切の製作品を休止し、一意精進以て全力を卿の御像製作に捧げ只管〔ひたすら〕傑作を希ひ、二ケ年間心血を注ぎ一世一代の大作として此処に工を竣へ本日除幕の式典を挙げらる、実に感概無量たるものあり。

始め銅像製作を委託せらるゝや先ず卿の御一代に関する文献御偉業及御遺跡伝説等全般的に研究調査を遂げ弥々御人格の崇高なるを偲び瑞巖寺、瑞鳳殿に御木像を仰ぎ又御画像を拝して御英姿を把握し御偉風に対し益々敬虔の念を深うし且又甲冑武具馬具等の御遺物をも拝観し特に必要を感じ馬学全般の調査研究を了し始めて二尺大の雛形に依り構図を練り、次に等身大の習作に移る。史実の考証と馬種の正鶴〔せいこく〕を期すべく史実は調査員諸氏に諮り、馬は陸軍獣医監横田熊五郎閣下及伯楽渡辺豊蔵氏に質し両氏の献身的なる御指導に依り漸く具像し伊達伯爵閣下始め関係各位多数の御批判と御賛同を仰ぎ等身雛型を決定し最後の本製作に入る。是よりは専ら芸術的作品たらしめんと更に心に鞭撻〔べんたつ〕し雛形に見る長所を採り足らざるを補ひ、全私の

魂魄を没入し極力研究の度を深め漸く完成の域に達するや、斎藤子爵閣下の御臨場を忝うし、特に最後の御批判と御賛同を仰ぎ此処に全く原型の石膏型完成を見るに至る。

是より直ちに美術鑄造家伊藤和助君の手に移し鑄造を開始す。伊藤君克く職工を監督し日夜勤勉刻苦而かも原型を忠実に観察し苟も私心を差挟まず主従一体只管工程を進め完成を急ぎ一方調査員の要望を容れ新規合金を研究し耐震、耐酸の両特徴を兼備せる合金を作成し之を以て鑄造せらる。抑も吾国鑄造界に一新機軸を劃せるものと言ふべし。

台石は特に我が国最高位の岡山県万成産の竜王石を採用し脚の御在世桃山建築の様式を採り入れ以て御像と時代を一致せしめたり。而して三面に脚の御一代を四期に分ち、元服、朝鮮征伐、支倉常長の南欧使節及権中納言の四枚の浮彫を配す。

台石請負人青山常治君は東京より住居を遥々現場に移転し、寝食をも忘れて配下を激励し設計図面を忠実に作製し見事に完成せり。

谷中田運送店主には身特に多忙にも拘らず作者の意を汲み万全の策を講じ嚴重に荷造し百里の長途平安無事に運送の任を全うせり。

畢竟するに伊藤、青山、谷中田三君は共に吾藩祖の御遺徳を敬慕し、青年団の意図を体得し作者の精神を汲み協力一致利害を超越し克く其の本分を完うせられたり。

三君に対し衷心より深甚の謝意を表するものなり。

顧れば此事業創始以来茲に五星霜、其の間関係各位の鋭意敢行の奮闘努力実に涙ぐましきものあり。

殊に原型並に鑄造、台石の工程に際し各方面の激励声援指導の力また偉大なるものあり。或は有益なる参考資料を提供して研究の便を与へられ或は真心をこめて神仏に其の成功を祈願せられ又銅像運送に際しては百万万全の道を開き一路平安を期し通路沿道の各町村何れも絶大なる歓迎の誠意至らざるなし実に感激涕沱〔ぼうだ〕として禁ずる能はず。

今日また此の盛典に陪し転〔うた〕た感激更に新なるを覚ゆ。謹みて茲に満腔の謝意を表し以て作者としての述懐を披瀝す。

藩祖公銅像製作者 小室 達』

注(1) 宮城県知事半井清、伯爵伊達興宗〔おきむね〕、子爵斎藤実、菅原通敬、東北大学総長本多光太郎、第二師団長秦真次、徳富蘇峰その他、青年団員3千5百名参集、伊達家令嬢登美子(6歳)除幕。台石の高さ16尺、銅像の高さ13尺8寸、重さ1千3百貫。

注(2) 戦後、金属回収業者のスクラップ置場の中から銅像の頭部が偶然発見され、今は仙台市博物館に保存されている。

注(3) 故地岩出山町城山に移設された。

注(4) 明治32年〔1899〕柴田郡槻木町〔現柴田町〕に生れた。白石中学校を経て大正13年東京美術学校彫塑科を首席で卒業、同校研究科にも学んだ。大正11年美校在学中第4回帝展、

に「想」初入選、第6回展で「構想」が特選、大正15年から無鑑査。その翌年から委員となった。以後、帝展、日展に出品を続けると共に、「伊達政宗騎馬像」をはじめ、伊沢平左衛門胸像、船岡小学校の乙女像などの製作もした。戦後伊豆半島から木彫材料を入手し、新たな製作意欲を燃やしたが、昭和28年惜しくも病歿した。55歳。

- 注(5) 安政5年〔1858〕胆沢郡水沢〔現水沢市〕留守家の家中斎藤耕平の長男として生れた。明治5年上京、翌年海軍兵学寮に入り明治10年卒業、15年海軍少尉に任官。2年後アメリカに留学、米公使館付武官兼任、明治21年帰国、海軍参謀部出仕、さらに海軍省勤務、侍従武官を勤め、海上勤務を経て明治31年海軍次官となり、軍務局長、艦政本部長、教育本部長を兼任。明治39年第1次西園寺内閣の海相に就任以来、大正3年第1次山本内閣倒閣まで5代の内閣に留任し、日露戦争後の海軍軍備拡張を推進した。この間大正元年大将に進級、2年後予備役となったが、大正7年現役に復帰し、朝鮮総督となり3・1独立運動に揺れる朝鮮に赴任した。従来の「武断政治」から「文治政治」への転換を図ったとされるが、警察組織を改変し治安体制の整備に努めた。昭和2年辞任、同年ジュネーブ平和会議全権、さらに枢密顧問官を経て、朝鮮総督に再任。昭和7年5・15事件後、軍部により政党内閣が否定され、中間的内閣として「挙国一致」内閣を組織。2年後総辞職の翌年内大臣となったが、首相当時から右翼・軍部の反感を買っており、昭和11年2・26事件で高橋是清らと共に暗殺された、79歳。

注(6) 『銘記』

此の仙台藩祖伊達政宗卿の銅像は宮城県青年団の建設する所なり、本団は昭和六年六月総経費金四萬二千五百五十円をもって五ヶ年継続事業として建設を実施するに決し昭和六年四月調査委員を挙げて、諸般の調査をなし製作を本県出身彫塑家小室達氏に託し県下各青年団は共同労作に従ふ等醸出分担金の造成に努め先輩有志亦激励援助を与ふるあり昭和九年九月地を仙台城御本丸址に卜して地鎮祭を行ひ十年五月像を東京より輸送し、団員の奉仕を以てこの所に致し卿の三百年祭に当りて除幕式を挙行し茲に輝く建設の功を竣る万世に至るまで此に詣る者をして卿の偉風を仰がしめんことを冀ふ

宮城県青年団』

- 資料 「宮城教育」第432号、伊達政宗公三百年祭記念号（宮城県教育会）
県社青葉神社三百年祭典誌（青葉神社）